

はじめに

本書は、戦後の日本語教育学におけるナショナリズムを、「思考様式」という概念にまつわる語りから跡付けようとするものである。

本書が生まれた直接のきっかけは、日本では1990年代に本格化した国民国家論のインパクトにある。

ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』(1987)や、西川長夫らによる研究プロジェクトとその成果(西川・松宮 1995)において、言語は国民国家形成のために不可欠な装置の一つとして指摘された。その指摘を受け、1990年代半ばには、日本という近代国民国家が創られていく過程と国語／日本語との関連を歴史的に分節化しようとする研究書が相次いで刊行された。酒井直樹(1996)、イ・ヨンスク(1996)、駒込武(1996)、安田敏朗(1997)などが、その代表的なものと言えよう。概括すれば、酒井は、18世紀半ばの国学の考察から、統一体としての日本語があるのだという観念がそれを話す者としての日本・日本人という統一体を生み出したという指摘を行った。また、イ、駒込、安田は、植民地・占領地での言語教育政策の理念から、日本語教育が非日本人を精神的に日本人化するための手段として推進されたことを論じた。

これらの研究は、統一体としての日本語という考え方自体がその使用場所・使用者としての日本・日本人を統一体として想定することと不可分であり、日本人でない人に日本語を教えることがそのまま日本・日本人への同化を迫る結果になりかねないという問題を、日本語教育関係者に突きつけたのである。その結果、日本語教育学からも、現在の日本語教育もまた依然として非日本人に同化を迫っているのではないか、日本語を完璧には話せない者として非日本人を排除する機能を果たしてしまっているのではないかといった問題提起がなされるようになった。春原

(1999), 川上 (1999) らは, 現在の日本語教育や日本事情教育が日本への同化を促すものであることを指摘していた。また, 森本 (2001) や拙論 (牲川 2002a, b, 2006) は, 批判的言説分析の手法を用いて日本語教室の会話や研究論文を分析し, 日本語教育の実践や理念が, 統一体としての「日本語＝日本・日本人」イメージを再生産してきたプロセスを, 具体的に明らかにしようとした。

これらの研究は, 現代の日本語・日本事情教育も, 戦前・戦中の日本語普及と同様に学習者を日本・日本人化する, あるいは日本・日本人でないものとして排除する場として機能していることを詳らかにした。その結果, 日本語教育実践の中には, そうした問題を乗り越えようとするものも現れてはきた (たとえば, 細川 2002, 河野 2003, 有田 2007, 熊谷 2009)。しかし同時に, 固定的・画一的な日本・日本人イメージや日本的なコミュニケーションスタイルを教え身につけさせようとする実践も続けられている (本書第5章参照)。「社会人として日本でやっていくためにはこう言ったほうがいい」といった類の, 善意に基づく素朴な言説が日本語教育の日々の実践の場から消える気配はない。

戦前・戦中, そして現代の日本語教育について, 自覚的・無自覚的に学習者の日本・日本人化 (またはそれからの排除) をめざしてきたのではないかという問題が指摘されているにもかかわらず, なぜ日々の実践レベルでは現状に変化が見られないのだろうか。

一つには, オルタナティブな実践の形がまだほとんど提示されていないということがある。統一的な日本語や日本文化というものを想定しないで, そもそも日本語や日本文化を教えるはずの日本語教育や日本事情教育がどのようにして成り立つのか。そうした想定が学習者にステレオタイプな日本・日本人・日本語像を抱かせてしまうという問題は理解できても, 教育対象の存在それ自体を否定してしまえば, 日本語教育や日本事情教育という教育分野自体が崩壊してしまうおそれが出てくる。また, そうした問題を乗り越えようといくつかの新しい取り組みが提案されてはいるものの, 個々の日本語教育実践者の目には, 自分にも可能な

ものとは映っていないのではないか。実践を取り巻く環境や日々の授業予定に制限されて、ラディカルで環境に恵まれた一部の人だけができることと、自分とは無関係なこととして捉えられているのではないだろうか。

オルタナティブを考えることは、日本語・日本事情教育という教育分野の存在自体を否定することになりかねず、日本語教育実践者にとって、日本語教育専門家としての自らのアイデンティティが揺るがされることに直結する。そして提示されたオルタナティブは、教科書を使い決まった範囲を教えていくことをほぼ義務化されている実践者にとって、特権的な人々にしかできない、自分とは無関係の遠いところできごとのように考えられているかもしれない。戦前・戦中、現代の日本語教育についての批判的研究がいくら問題を指摘したとしても、自らの日本語教育実践者としての存在理由を否定されたり、また現実的に別の形の実践が無理だと感じられたりしているとすれば、問題の指摘以前の実践が繰り返されていくことになるだろう。

国民国家論という研究視点からの戦前・戦中、そして現在の日本語教育についての批判的研究が、日々の実践や言説を完全には覆しえないもう一つの理由として、筆者は、戦前・戦中期と現在との間に約60年もの研究の空白期があることを挙げたい。

本書が論じていくように、戦前・戦中までの日本語教育と現代の日本語教育とは、目標が大きく異なっている。前者がむき出しの同化イデオロギーに基づき、精神的な日本人化を強制する日本語教育であったのに対し、後者は日本人と同レベルの能力を育成し摩擦なく日本社会に適應するための日本語教育である。両時代とも、統一的な日本語を前提とし学習者に日本人化を迫るという側面をもっているのだと批判されても、現在の日本語教育実践者は、自分たちは植民地や占領地で行われたような強制的同化をめざしてはいないと反論するのではないだろうか。現代の日本語教育は、戦中までとは異なり、学習者を日本人化すること自体をめざすものではない。むしろ、学習者が日本社会に問題なく適應でき

るようにという善意から、日本文化とは何か、日本人はどう言うかを教えている。しかし本書第5章で論じるように、そうした善意が結果的に、学習者を日本社会になじむべき存在、問題を起こさない存在として位置づけることになり、日本・日本人への同化を迫っている。こうした指摘に対しては、たとえ同化を迫ったとしてもそれは学習者自身のためであり、国家のためであった戦前・戦中の日本語教育とはまるで異なるという捉え方もありうるだろう。戦前・戦中期の日本語教育の問題は、現在の実践者にとってあまりに時間的に遠い出来事であり、現在との連続性よりも断絶のほうが強く感じられているのではないか。

問題を乗り越えようとするオルタナティブな実践は自分から空間的にあまりに遠い出来事に思われ、またあからさまに暴力的な同化を指向した実践は時間的に遠い過去のものとして思える。そして問題に正面から向き合おうとすれば、自己の存在理由が危うくなる。現在の日本語教育実践者が、問題を無関係のものとしか思えない、さらに無関係に思おうとするのも無理はない。しかしそうした無関心さこそが、日常的な「日本語＝日本・日本人」という言説の維持・再生産を支えてしまう。

本書は、戦後60年間の日本語教育学において、「思考様式」をキーワードとする言説がいかに変化してきたのか、あるいは変化してこなかったのかを跡付ける試みである。分析の基本的な視点は、日本語教育とナショナリズムとの関係であり、日本語教育学においてナショナルな言説がどのように編まれてきたのかを十分に記述することをめざす。長期にわたる言説の変化・不変をつぶさに記していくことが、ナショナリズムという問題を今に続く自らの問題として受けとめるとともに、変えることができないと思われる日々の実践、それを支える理念も実は変わりうるのだという希望をもつことにつながると考えるからである。

目 次

はじめに	iii
第1章 なぜ戦後日本語教育学のナショナリズムを 問うのか	1
1 ナショナリズムという信仰	2
2 国民国家の成立と言語	4
2.1 国民国家と言語	4
2.2 日本と日本語	6
2.3 言語ナショナリズムによる統一と排除	9
3 日本語教育と日本語ナショナリズム	11
3.1 日本語ナショナリズムを揺るがす日本語教育	11
3.2 日本語普及の論理	13
3.3 日本語普及に期待された役割	15
3.4 帝国主義体制における日本語普及の位置づけ	20
4 日本語教育史研究の歴史観	23
5 本書の研究方法および目的	29
5.1 方法：教育言説分析	29
5.2 時期：戦後60年間	34
5.3 対象：日本語教育学	39
5.4 論点：ナショナリズムとの関係	44

第2章 思考様式言説の変遷	47
1 なぜ思考様式言説なのか	48
1.1 日本への包摂	48
1.2 ナショナリズムの二重の原理	49
1.3 自明の正しさ	50
1.4 戦前・戦中との連続性・断絶	53
1.5 言語学とナショナリズム	57
2 研究目的	58
3 量的分析による時期区分	60
3.1 対象および方法	60
3.1.1 記述単位の抽出対象	60
3.1.2 記述単位の抽出：「日本人の思考様式」	61
3.1.3 記述単位の分類カテゴリー	63
3.2 カテゴリーによる分類結果	65
3.2.1 分類結果	65
3.2.2 時期区分	68
第3章 第I期「日本語＝日本人の思考様式論」 前史：敗戦～1970年代初め	71
1 質的分析の視点と対象	72
1.1 分析の視点	72
1.2 分析の対象	73
2 第I期内の時期区分	74
3 「日本語＝日本人の思考様式」の潜在化： 敗戦～1950年代初め	75
3.1 敗戦後の日本語教育	75
3.2 戦中と戦後の連続性	77

3.3	占領期の思考様式言説	81
3.4	占領期の日本語教育実践	85
3.5	小括	86
4	母語・日本語の思考様式への言及：	
	1950年代半ば～60年代前半	89
4.1	日本語の思考様式	89
4.2	母語の思考様式	92
4.3	変わるべき日本語＝日本人	94
4.4	小括	96
5	母語・日本語の思考様式の研究開始：	
	1960年代後半～70年代初め	99
5.1	母語・日本語の思考様式の実証研究：日本語教育学の動き	99
	5.1.1 母語の思考様式の干渉	99
	5.1.2 日本語の思考様式研究	102
5.2	日本人の思考様式から説明される日本語：日本語学の動き	106
	5.2.1 参酌されなければならない日本人の思考様式	106
	5.2.2 日本人の思考様式を暗示する日本語	107
5.3	小括	109
第4章	第II期「日本語＝日本人の思考様式」	
	による包摂：1970年代半ば～80年代前半	111
1	外国語と民族・国民の思考様式	112
1.1	言語と文化，言語と思考様式の関係についての論調	112
1.2	第2言語教育における民族・国民の思考様式	114
	1.2.1 理解させたい民族の思考様式	114
	1.2.2 外国語学習＝外国的な思考様式の学習	116

1.3	アメリカ語が制約する学習者の思考様式	119
2	「日本語＝日本人の思考様式」の教育・学習	123
2.1	教育・学習内容としての日本人の思考様式	123
2.2	日本語習得の必要条件としての日本人の思考様式	125
2.2.1	日本人の思考様式による洗脳とその困難	125
2.2.2	日本語習得に不可欠な日本人の思考様式の植えつけ	131
2.2.3	日本語習得を困難にさせる日本人の思考様式	133
2.2.4	戦中の言語ナショナリズムの復活	135
2.3	「日本精神」批判	137
3	小括	140

第5章 第III期「日本人の思考様式」理解がもたらす 包摂と差異化：1980年代後半～2000年代前半

1	日本に対処・適応するために	146
2	交流・体験から理解する日本人の考え方	150
2.1	多様性の一つとしての日本人の考え方	150
2.2	実践報告概要	151
2.3	日本人の考え方とは何か	153
2.4	真正さを獲得する日本人の考え方	155
2.5	交流・体験から発見するという方法	157
2.6	異質性・多様性の客観的・相対的理解	160
3	学習者中心	162
3.1	多様性・異質性の理解と学習者中心との接点	162
3.2	日本語教育における学習者中心の位置	163
3.3	異文化性の重視	164
3.4	母国文化／日本文化の異質性	166
4	異質性・多様性の理解という名の排除	168

5	日本人の思考様式による洗脳言説の残存または回帰	172
6	小括	175
第6章	戦後日本語教育学とナショナリズム	179
1	思考様式言説の変遷	180
1.1	戦前・戦中の「日本語＝日本精神論」との連続性と断絶	180
1.2	ナショナリズムに規定された日本語教育学の理念	183
1.3	ナショナリズムに亀裂をもたらす日本語教育学の理念	185
2	戦後日本語教育学は何をめざしてきたのか：結びにかえて	188
2.1	戦後日本語教育学の教育目標	188
2.2	無自覚な日本への包摂	189
2.3	自覚的な日本への包摂	193
2.4	自覚的な日本からの差異化	195
2.5	無自覚な日本からの差異化／日本への包摂	196
2.6	包摂／差異化言説が共有する問題点	198
	おわりに	201
	引用文献一覧	207
	巻末資料	219
	索引	223

第 1 章

なぜ戦後日本語教育学の
ナショナリズムを問うのか

1 ナショナリズムという信仰

本書は、戦後の日本語教育学がいかにナショナリズムに規定されまたそれを維持してきたのかを、言説分析によって明らかにしようとするものである。

最初に、本書でいうナショナリズムとは何かを説明する必要があるだろう。

ナショナリズムを主題とした論考は、それを主題にしているにもかかわらず、ナショナリズムを定義することの困難について言及している。吉野(1997)は、ナショナリズムには多様な用法があるとして、学問的な用法でも研究によって強調点がまちまちであること、それ以上にナショナリズムに関する一般的なイメージは、時と場所によって多様であるとする(p. 10)。また、ナショナリズムという概念の起源と広がりを描いたアンダーソンも、「ネーション」「ナショナルティ」「ナショナリズム」といった概念は、分析することはもちろん定義することも難しいとしている(Anderson 1991=1997: 20)。

こうした定義の困難さを踏まえた上で、吉野は暫定的に、「ナショナリズムとは、「我々」は他者とは異なる独自の歴史的、文化的特徴を持つ独自の共同体であるという集合的な信仰、さらにはそうした独自感と信仰を自治的な国家の枠組みの中で実現、推進する意志、感情、活動の総称である」(吉野 1997: 10-11)と定義している。この定義でも、「我々」とは誰か、「共同体」とは何かなどは明示されておらず、厳密な定義とは言えない。しかし、何かしらの「我々」の「共同体」というものがあるという「信仰」、そうした曖昧な自明性こそがナショナリズムの特質であろう。

だがこうした「信仰」を、一人ひとりが心の中に抱いている思いにすぎないということとはできない。吉野の定義でも示唆されているように、「我々の共同体」という信仰は、それを国家の枠組みの中で実現・推進しようとする意志や感情、活動となり、現実世界に対して作用するから

第 2 章

思考様式言説の変遷

1 なぜ思考様式言説なのか

1.1 日本への包摂

第2章以降では、第1章で示した研究の視座から、思考様式言説の内容と変遷を跡付ける。

思考様式言説とは、「思考様式」「発想法」「心性」など、人間の考えや心が特定のパターンをもつという意味の用語、およびそれを意味づける記述全体のことを指す。

思考様式言説を分析対象に選ぶ第一の理由は、戦後の日本語教育学に、日本語学習者に対して日本人の思考様式への同化を求めるという、問題をもつ言説が存在したからである。

1975年頃の日本語教育の論考を読むと、思考様式言説をしばしば目にする。「思考様式」「発想法」などの用語は、単独では、考えや心の特定パターンということしか意味しない。しかし、これらの語を含む文脈全体を考察すると、そこに重要な問題があることに気づかされる。

その代表的な例は、宮地（1975）である。詳細は後述するが、この論考で主張されているのは、言語と思考様式とは相互に関係するので、日本語学習者を日本人の思考様式で「洗脳」（p. 22）したほうがよいというものである。宮地は、証明の困難さを自身で述べつつも、言語と思考様式とが規定しあっているという言明を正しい事実であるかのように示し、その「正しい事実」を根拠に、日本人の思考様式で洗脳することが日本語学習においてはあたかも必要かつ自然であるかのように述べている。日本語を習得するためには精神的な日本人化が必要条件だとするこの言説は、「日本語＝日本人の思考様式」という図式を根拠に、学習者の日本人への包摂を正当なこととして主張しようとする。

第3章

第I期「日本語＝日本人の思考様式論」
前史：敗戦～1970年代初め

著作権保護コンテンツ」

1 質的分析の視点と対象

1.1 分析の視点

第2章では、日本人の思考様式という概念が現れる記述を、4つのカテゴリーで分類することにより、三つの時期区分を導き出した。すなわち、記述内容に顕著な違いの見られる時期区分として、第I期：思考様式言説が出現しない時期、第II期：「日本語＝日本人の思考様式論」が出現した時期、第III期：「日本人の思考様式論」が出現した時期という三期が得られた。第3章から第5章では、各期ごとの記述内容を質的分析によって詳細に見ていく。

その際の分析視点は、まず第一に、「日本語＝日本人の思考様式論」の「＝」部分、つまり、日本語と日本人の思考様式とがどのように関連づけられているかに着目することである。関連づけについて詳しい説明がなされているか否かにより、自覚的に論者自身が関連づけたのか、無自覚に自明視していたのかわかるだろう。また、概念規定や関連づけの説明論理に矛盾や問題がないかについても検討する。

第二に、「日本語＝日本人の思考様式」を教育・学習内容として位置づけている場合、それを習得させることで日本人へと包摂しようとしているのか、あるいは非日本人には習得できないとして、日本人から排除しようとしているのかについても考察する。「日本語＝日本人の思考様式論」とは、日本語と日本人の思考様式とは関連があるとする言説であって、日本語をシンボルとして日本人の統一性を形成・維持していこうとする日本語ナショナリズムを支える。「日本語＝日本人の思考様式」という図式に基づく日本語ナショナリズムを、非日本人に日本語を教えるという場に適用するならば、日本語ナショナリズムの論理は、非日本人を日本へと包摂しようとする主張と、非日本人を日本人とは異なるものとして差異化し排除する主張との両方を生み出しうる。「日本語＝日本人の思考様式論」を見ることで、日本語教育学が、日本人への包摂や

第4章

第II期「日本語＝日本人の思考様式」による包摂：1970年代半ば～80年代前半

著作権保護コンテンツ」

1 外国語と民族・国民の思考様式

1.1 言語と文化、言語と思考様式の関係についての論調

第3章で見たように、1960年代終わりには、日本語の特徴を説明するとき、何気なく日本人の思考様式の特徴を持ちだすという記述が見られるようになった。こうした何気ない記述を論理的に成立させるためには、日本語と日本人の思考様式とは何らかの関係があるということ、さらには言語と国民・民族の思考様式との間に関係があるということについての説明が必要である。

1972年9月号の『月刊言語』の特集は「言語 社会 文化」だった。『日本語教育』で「日本語教育」と文化」の特集が組まれるのは1975年のことであるが、言語学ではそれ以前から、言語・社会・文化の關係に注目が集まっていたと言える。特集号中の論考ではないが、同じ1972年の『月刊言語』に、文化人類学者の谷泰による「言語と文化——成分分析をめぐる」（谷 1972）があり、当時の言語と文化をめぐる研究状況が述べられている。

言語が文化研究にとって重要な手がかりであることは、多くの人びとによって認められている。エッセイ風な比較文化論の中でも、しばしば言語比較を通じて、文化比較の手がかりにしている人も少なくない。
(谷 1972 : 11)

「エッセイ風な比較文化論」が何を指すかは、出典が記されていないので断定はできないものの、刊行時期と内容からすれば、土居健郎の『「甘え」の構造』（土居 1971）である可能性が高い。1971年に刊行されたベストセラーであり、「日本人の心理に特異的なものがあるとするならば、それは日本語の特異性と密接な関係があるにちがいない」（p. 6）として、「甘え」「気」「人見知り」などの日本語の用法をもとに、日本

第5章

第Ⅲ期「日本人の思考様式」理解が
もたらす包摂と差異化：
1980年代後半～2000年代前半

著作権保護コンテンツ」

1 日本に対処・適応するために

1980年代半ばになると、それ以前に見られた「日本語＝日本人の思考様式論」（量的分析のカテゴリー A）は減り、この図式に基づいて日本語習得のために日本人の思考様式の教育・学習が必要だとする記述（カテゴリー B）に関してはほぼ皆無になる。それと入れ替わって出現するのが、日本語と結びつけずに、日本人の思考様式を実体視する記述（カテゴリー C）と、同じく日本語とは結びつけずに、日本人の思考様式というものを教育・学習内容とする記述（カテゴリー D）である。つまり、80年代半ば以降も、日本人の思考様式の教育・学習が必要という記述は存在し続けるのだが、その理由は日本語習得に必要なからではない。日本語とは無関係に、日本人の思考様式の教育・学習が必要という主張がなされるようになるのである。

日本語と関係がないとすれば、なぜ日本語教育の場で日本人の思考様式を教えなければならないのか。80年代後半から90年代半ばにかけて見られたのは、日本への適応・対処のためという理由で、日本人の思考様式の教育・学習を促す記述である。

インカピロム（1988）は、学生のさまざまな要望に応えるため、「日本語文法、あるいは言葉を教えるだけではなく言葉を一つの手段として日本事情、社会、習慣、価値観などを教える必要が生じてきている」（p. 111）と、タマサート大学（タイ）での日本事情教育の取り組みを紹介している。70年代半ばから80年代前半の思考様式言説と比較すると、日本人の思考様式の位置づけが変わったことが読み取れる。70年代半ばから80年代前半に存在したのは、日本語を習得するために日本人の思考様式を学ぶべきだとする記述であり、ここで重視されていたのはあくまでも日本語習得であった。しかし、インカピロムは、日本語を「日本事情、社会、習慣、価値観」の教育の一手段としており、日本語と同等またはそれ以上に、日本人の価値観などの教育に力点を置いている。その教育のために作成された自選教材について、インカピロムは次のよ

第6章

戦後日本語教育学とナショナリズム

1 思考様式言説の変遷

1.1 戦前・戦中の「日本語＝日本精神論」との連続性と断絶

戦後日本語教育学におけるナショナリズム言説という主題を具体化するにあたり、本書では、(1)戦前・戦中の「日本語＝日本精神論」との連続性と断絶、(2)ナショナリズムに規定された日本語教育学の理念、(3)ナショナリズムに亀裂をもたらす日本語教育学の理念、という三つの分析観点を設定し思考様式言説を考察した。本章ではまず、これらの観点から思考様式言説の変遷を捉えなおし、戦後日本語教育学とナショナリズムの関係について総括する。

一つ目は、戦前・戦中の「日本語＝日本精神論」は、敗戦後まで連続したのかまたは断絶したのかという問いである。本書の考察によれば、「日本語＝日本精神論」は、1950年代半ばから60年代前半までをのぞき、「日本語＝日本人の思考様式論」へと姿を変えて存在してきたといえることができる。

敗戦直後には、日本語を通じて日本精神を教えるべきだというような、戦中までの日本語普及理念をそのまま引き継いだような記述は見られなかった。他方で、日本語普及の関係者が敗戦後まもなく刊行した著書において、戦中までの日本語普及の構造や理念は問題化されておらず、そうした構造・普及を支えた「日本語＝日本精神論」が批判的に振りかえられた形跡もない(上甲 1948, 保科 1949)。

またこの時期には、「日本人の mentality」を体得させる日本語教育を評価する記述(厨川 1946)や、「日本人の思考方法」がわからないと日本語の理解が難しいとする発言(友部 1953)が見られた。日本語と日本人の内面性が何らかの形で結びついているという前提があって初めて現れる記述である。ただし、いずれもコラムやインタビュー記事に現れたものであり、日本語と日本人の思考様式の関係が強調されているわけではなく、それについての詳しい説明もない。つまりこれらの記述

引用文献一覧

- 浅野鶴子, 1956, 「ことば随筆」『言語生活』57: 59-61.
- 浅野鶴子, 1965, 「実践面における「が」と「は」」『日本語教育』7: 49-56.
- 浅野鶴子, 1979, 「東京日本語学校の創設期——木村宗男先生に聴く」『日本語教育研究』18: 36-44.
- 浅野鶴子, 1980, 「東京日本語学校の創設期——木村宗男先生に聴く」『日本語教育研究』19: 19-27.
- 有田佳代子, 2007, 「日本語教室における「論争上にある問題」(controversial issues)の展開についての試論——「日中関係の悪化」を例として」『リテラシーズ——ことば・文化・社会の日本語教育へ』くろしお出版, 3: 115-130.
- 有馬俊子・石沢弘子, 1979, 「視聴覚教材の利用法——海外技術者研修協会の場合」『日本語教育』38: 69-92.
- 安東伸介・岩崎春雄・高宮利行編, 1981, 『厨川文夫著作集 下巻』金星堂.
- イ・ヨンスク, 1996, 『「国語」という思想』岩波書店.
- 池尾スミ・石黒ヤヘ子・木村宗男・栗原由枝・杉田美和子・砂川俊子・長沼守人・野口隆子・鈴木潤吉・長沼美奈子・山下秀穂, 1991, 「座談会 戦中・戦後初期の日本語教育を語る(第1回)——長沼直兄と日本語教育振興会および草創期の言語文化研究所・東京日本語学校」『日本語教育研究』25: 63-104.
- 池尾スミ・石黒ヤヘ子・木村宗男・栗原由枝・杉田美和子・砂川俊子・長沼守人・野口隆子・鈴木潤吉・長沼美奈子・山下秀穂, 1993, 「座談会 戦中・戦後初期の日本語教育を語る(第2回)——長沼

- 直兄と日本語教育振興会および草創期の言語文化研究所・東京日本語学校』『日本語教育研究』26：5-36.
- 池尾スミ・木村宗男・栗原由枝・杉田美和子・長沼守人・長沼美奈子・安良岡康作・安良岡みち・山下秀雄，1997，「体験者の証言 2 第二次大戦下と戦後初期における日本語教育（II）——長沼直兄の教科書と日本語教育振興会，大陸と南方の日本語教育」『日本語教育研究』33：40-76.
- 池上嘉彦，1993，「学術文庫版のための訳者解説追補」，B. L. ウォーフ（池上嘉彦訳）『言語・思考・現実』講談社，321-338.
- 稲村松雄，1947，「アメリカの日本語教育——英語教育への反省」『東海人』2（10）：26-30.
- 今井むつみ，2000，「サビア・ワーフ仮説再考——思考形成における言語の役割，その相対性と普遍性」『心理学研究』71（5）：415-433.
- 今田滋子，1965，「「象は鼻が長い」をめぐる Transformation」『日本語教育』6：38-45.
- 今津孝次郎，1997，「「教育言説」とは」今津孝次郎・樋田大二郎編『教育言説をどう読むか——教育を語ることばのしくみとはたらき』新曜社，1-17.
- インカピロム，プリアー，1988，「タマサート大学における日本文化社会の教授方法」『日本語教育』65：109-115.
- 上田万年，1903，「国語と国家と」『国語のため』富山房，1-28.
- 上山民栄，1990，「アメリカの大学における日本語「上級」の問題点と提案」『日本語教育』71：56-68.
- 大濱徹也，1992，「日本語教育と日本文化」『日本語学』11（3）：75-81.
- 大平未央子，2001，「ネイティブスピーカー再考」野呂香代子・山下仁編著『「正しさ」への問い——批判的社会言語学の試み』三元社，85-110.
- 岡崎敏雄・岡崎眸，1990，『日本語教育におけるコミュニケーション・ア

- ブローチ』凡人社。
- 小川誠, 1995, 「マラヤ大学予備教育課程における日本語教育」『日本語教育』85: 151-159.
- 小川芳男, 1973, 「外国語学習の方法と意義」『日本語教育』22: 1-9.
- 川上郁雄, 1999, 「『日本事情』教育における文化の問題」『21世紀の「日本事情」——日本語教育から文化リテラシーへ』くろしお出版, 創刊号: 16-26.
- 川瀬生郎, 1968, 「助詞の分類法についての一試案と若干の助詞についての考察」『日本語教育』11: 28-36.
- 川瀬生郎, 1985, 「国立国語研究所日本語教育センター」『日本語学』4(7): 64-72.
- 北条淳子, 1973, 「上級クラスにおける読解指導の問題」『日本語教育』21: 71-78.
- 木村宗男, 1956, 「日本語教育の現場から」『言語生活』62: 22-26.
- 木村宗男, 1974, 「日本語教育の歴史と展望」『言語生活』279: 25-36.
- 木村宗男, 1990, 「終戦直後の日本語教育」『日本語教育』70: 1-8.
- 木村宗男編, 1991, 『講座日本語と日本語教育 15 日本語教育の歴史』明治書院.
- 金田一春彦, 1965, 「『は』と『が』の使い分けについて」『日本語教育』7: 57-61.
- 釘本久春, 1962, 「外国人に対する日本語教育小史覚え書」『日本語教育のために——創刊準備号』日本語教育学会設立準備委員会, 2-9.
- 久野由宇子, 1996, 「日本語中級とは何か——『文化中級日本語 I』の作成を通して」『日本語教育』88: 160.
- 窪田富男, 1985, 「日本語教育学会」『日本語学』4(7): 23-39.
- 熊谷由理, 2009, 「日本語教室でのクリティカル・リテラシーの実践へ向けて」『リテラシーズ——ことば・文化・社会の日本語教育へ』くろしお出版, 4: 71-85.
- 倉又浩一, 1973, 「第二外国語としてのドイツ語教育の最終目標」『日本

- 語教育』22：27-34.
- 厨川文夫, 1946, 「日本語教授法——英学一家言」『英語青年』92(6)：29.
- 経済企画庁総合計画局, 1989, 『アジア太平洋地域繁栄の哲学——総合国力の観点からみた日本の役割』大蔵印刷局.
- 言語文化研究所, 1981, 『長沼直兄と日本語教育』開拓社.
- 小出詞子, 1956, 「第33回大会発表研究 英語国民に対する(外国語としての)日本語教授に於ける諸問題」『言語研究』29：51-54.
- 小出詞子, 1961, 「英語国民に日本語のアクセントを教えるについて」『言語生活』117：50-55, 61.
- ゴウ, リサ／鄭暎恵, 1998, 「私という旅——厳しい階級社会でレイシズムと闘うために(承前)」『現代思想』26(2)：28-37.
- 河野理恵, 2003, 「大学院での「日本事情」教育——「日本人論」をとおして」『21世紀の「日本事情」——日本語教育から文化リテラシーへ』くろしお出版, 5：96-109.
- 国語審議会, 2000, 『国際社会に対応する日本語の在り方』
- 国府種武, 1961, 「台湾における日本語教育にあらわれた国権思想」『日本文学』10(9)：719-724.
- 国立国語研究所, 1956, 『言語生活』62.
- 国立国語研究所, 1960, 「言語生活一号から百号まで主要目録(付録)」『言語生活』100：102-112.
- 国立国会図書館, 2011, 「雑誌記事索引検索」(<http://opac.ndl.go.jp/Process>, 2011.6.27検索).
- 興水実, 1956, 「日本語教育の歴史」『言語生活』62：46-47.
- 駒込武, 1996, 『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店.
- 近藤純子, 1974, 「侵略と日本語教師」『日本語教育』25：35-38.
- 近藤妙子・藤井慶子・末田朝子, 2000, 「一般日本人参加の会話授業の試み——ビクターセッションを通して」『日本語教育』106：77.
- 酒井直樹, 1996, 「死産される日本語・日本人——日本語という統一体

- の制作をめぐる（反）歴史的考察』『死産される日本語・日本人——「日本」の歴史-地政的配置』新曜社，166-210.
- 榊原政弥，1970，「助詞「も」を中心として日本語を観る」『日本語教育』15：14-36.
- 榊原政弥，1975，「言語と文化と教育と平和」『日本語教育』27：30-38.
- 阪田雪子，1960，「外国人に日本語を教えるということ」『言語生活』104：66-88.
- 阪田雪子，1989，「日本語教育の内容」『日本語教授法』桜楓社，64-89.
- 作田啓一，1967，『恥の文化再考』筑摩書房.
- 佐藤純一，1956，「日本語教育の現場から」『言語生活』62：32-36.
- 塩田勉，1971，「日本語の発想・英語の発想——冠詞の発想形式と助詞について」『講座日本語教育』7：130-161.
- 塩谷奈緒子，2003，「「学習者の解放」の環境設定と活動支援——「学習者の教室からの解放」と「学習者の教室内での解放」」『21世紀の「日本事情」——日本語教育から文化リテラシーへ』くろしお出版，5：18-34.
- 上甲幹一，1948，『日本語教授の具体的研究』旺文社.
- 上甲幹一，1956，「日本語教授と日本語学習の参考書一覧」『言語生活』62：48-51.
- 末田美香子，2003，「日本人参加者を活用した会話指導の試み——インターアクションのための視点に着目して」『日本語教育』117：143.
- 杉山純子・太田孝子，2001，「「日本人パートナー」が参加した「応用会話」クラス——2000年度4月～7月の実践報告」『日本語教育』110：189.
- 鈴木忍，1956，「東南アジア学生の母語の日本語学習に及ぼす影響」『言語生活』62：27-31.
- 鈴木忍，1963，「発音の指導と問題点——タイ語国民を中心に」『日本語教育』2：7-20.
- 牲川波都季，2001，「「日本事情」における「学習者主体」概念の功罪」

- 『2001年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会, 127-132.
- 牲川波都季, 2002a, 「同化主義としての「学習者中心」」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』15: 163-177.
- 牲川波都季, 2002b, 「学習者主体とは何か」, 細川英雄編『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人社, 11-30.
- 牲川波都季, 2004a, 「日本語教育における言語と思考—その意味づけの変遷と問題点」『横浜国立大学留学生センター紀要』11: 61-85.
- 牲川波都季, 2004b, 「日本語教育学における「思考様式言説」の変遷」『日本語教育』121: 14-23.
- 牲川波都季, 2006, 「「共生言語としての日本語」という構想——地域の日本語支援をささえる戦略的使用のために」植田晃次・山下仁編著『「共生」の内実——批判的社会言語学からの問いかけ』三元社, 107-125.
- 関正昭, 1997a, 「日本語教育史」『日本語教育』94: 61-65.
- 関正昭, 1997b, 『日本語教育史研究序説』スリーエーネットワーク.
- 関正昭・平高史也編, 1997, 『日本語教育史』アルク.
- 占領期メディアデータベース化プロジェクト委員会(代表・山本武利), 2009, 「占領期新聞・雑誌記事情報データベース」(<http://m20thdb.jp/login>, 2011. 6. 28検索)
- T. J. K. 生, 1947, 「進駐軍雑記帳(1)」『陽光』2(3): 39-41.
- Downs, James A., Gabriel Bergeran, Norman Danglas Smith, Laurenz Krüer, 西尾実, 1952, 「外国人は日本語をどう見ているか」『言語生活』7: 2-10.
- 高野明, 1952, 「ロシアにおける日本語学校と伝兵衛」『日本歴史』50: 27-28.
- 高野明, 1953, 「“ロシアに於ける日本語学校と伝兵衛”補遺」『日本歴史』59: 34-36.
- 谷泰, 1972, 「言語と文化——成分分析をめぐる」『月刊言語』1

著作権保護コンテンツ

- (6) : 10-18.
- 田島弘司, 1995, 「日本語教育行政の歴史」『日本語学』14 (3) : 100-109.
- 田中克彦, 1981, 『ことばと国家』岩波書店.
- 田中望, 1996, 「地域社会における日本語教育」鎌田修・山内博之編『日本語教育・異文化間コミュニケーション——教室・ホームステイ・地域を結ぶもの』凡人社, 23-37.
- 田中宏, 1975, 「日本語教育における〈八・一五〉」『月刊アジアの友』135 : 4-13.
- 田中里奈, 2005, 「日本語教育における教育内容の思想的「連続性」の問題——教科書の内容分析から見る「国家」「国民」「言語」「文化」」早稲田大学大学院日本語教育研究科2004年度修士論文.
- 田中里奈, 2006a, 「戦後の日本語教育における思想的「連続性」の問題——日本語教科書に見る「国家」「国民」「言語」「文化」『リテラシーズ——ことば・文化・社会の日本語教育へ』くろしお出版, 2 : 83-98.
- 田中里奈, 2006b, 「「国家」「国民」「言語」「文化」の結びつき——戦後から1980年代における日本語教科書の内容分析と作成者の論考を中心に」『早稲田大学日本語教育研究』9 : 77-91.
- 田中里奈, 2006c, 「戦後の日本語教育における政策の変遷——政策文書の分析を通して」『日本文化研究』19 : 423-439.
- 茅野直子・仁科喜久子, 1978, 「学生の誤用例分析と教授法への応用」『日本語教育』34 : 57-66.
- 辻村敏樹, 1989, 「対遇表現（特に敬語）と日本語教育」『日本語教育』69, 1-10.
- 寺村秀夫, 1968, 「日本語名詞の下位分類」『日本語教育』12 : 42-57.
- 土居健郎, 1971, 『「甘え」の構造』弘文堂.
- 得丸智子, 1998, 「留学生と日本人学生による作文交換活動—構成的エンカウンター・グループを応用して」『日本語教育』96 : 166-177.

- 富田隆行, 1965, 「中国語と日本語——中国語と日本語の漢字は同じではない」『日本語教育』7: 69-71.
- 富田隆行, 1982, 「初級のカリキュラムとその教授法——亜細亜大学の場合」『日本語教育』46: 23-30.
- 友部浩記, 1953, 「日本語を学ぶ外国人——言葉で苦勞する人々9」『言語生活』21: 31-33.
- 中居順子, 2001, 「異文化コミュニケーション能力を伸ばすアクションロールプレーの実践報告」『日本語教育』111: 135.
- 長沼直兄, 1962, 「英語国民に対する日本語教育」『日本語教育』1: 22-30.
- 中根千枝, 1967, 『タテ社会の人間関係——単一社会の理論』講談社.
- 永野賢, 1965, 「文章における「が」と「は」の機能」『日本語教育』7: 32-48.
- 中村妙子, 1982, 「分かりにくさの諸相——中級の購読クラスの指導をとおして」『日本語教育』46: 105-120.
- 西尾珪子, 1985, 「国際日本語普及協会の歩み」『日本語学』4(7): 55-63.
- 西尾寅弥, 1956, 「外国人の日本語学習」『言語生活』62: 12-19.
- 西川長夫, 1987, 「国家とナショナリズムをめぐる三つの断章——モントリオール・未来都市の夢(2)」『歴史学研究』570: 30-31.
- 西川長夫, 1995, 「日本型国民国家の形成——比較史的観点から」西川長夫・松宮秀治編『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』新曜社, 3-42.
- 西川長夫・松宮秀治編, 1995, 『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』新曜社.
- 西口光一, 1991, 「コミュニカティブ・アプローチ再考——伝統的アプローチとの融合をめざして」『日本語教育』75, 164-175.
- 日本語教育学会, 1967, 「会員名簿」『日本語教育』10: 45-62.
- 日本語教育学会, 2010, 「2010会員名簿——社団法人日本語教育学会」

- (<http://www.nkg.or.jp/guide/g-meibo2010.pdf>, 2011. 11. 5 検索).
- 日本語教育学会, 2011, 「会員数の推移」(<http://www.nkg.or.jp/guide/g-kaiinsui.htm>, 2011. 11. 5 検索).
- ネウストブニー, J. V., 1983, 「日本語教育と二重文化教育」『日本語教育』49: 13-24.
- 春原憲一郎, 1999, 「学習者ストラテジーとネットワーキング」宮崎里司・J. V. ネウストブニー編, 『日本語教育と日本語学習——学習ストラテジー論にむけて』くろしお出版, 183-195.
- 平高史也, 1999, 「日本語教育史研究の可能性」『日本語教育』100: 45-56.
- 広田照幸, 2001, 『教育言説の歴史社会学』名古屋大学出版会.
- 鬢櫛久美子, 2000, 「アイデンティティ」教育思想史学会編『教育思想事典』勁草書房, 3-5.
- 保科孝一, 1949, 『国語問題五十年』三養書房.
- 細川英雄, 2002, 『日本語教育は何をめざすか——言語文化活動の理論と実践』明石書店.
- 細川英雄, 2003, 「「個の文化」再論——日本語教育における言語文化教育の意味と課題」『21世紀の「日本事情」——日本語教育からリテラシーへ』くろしお出版, 5: 36-51.
- 町田敬子, 1991, 「新聞教材を主教材にした日本語教育」『日本語教育』73: 219-220.
- 松永典子, 1999, 「日本語教育史研究の課題と展望 (I)」『Polyglossia』2: 45-53.
- 松永典子, 2000, 「日本語教育史研究の課題と展望 (II)」『Polyglossia』3: 65-73.
- 松村明, 1965, 「欧米人の「は」「が」観——ロドリゲスからチャムブレンまで」『日本語教育』7: 2-20.
- 松村一登, 1995, 「世界の中の日本語——日本語は特異な言語か」『アジ

- ア・アフリカ言語文化研究所通信』84：10-20.
- 馬淵仁，2002，『「異文化理解」のディスコース——文化本質主義の落とし穴』京都大学学術出版会.
- 丸山敬介，1995，「留学生10万人計画」以後の日本語教育『同志社女子大学日本語日本文学』7：76-101.
- 三上章，1960，『象ハ鼻ガ長イ——日本文法入門』くろしお出版.
- 三上章，1965，「「は」と「が」の研究法」『日本語教育』7：21-31.
- 三国純子・小山真理，2000，「海外の大学生を対象とした短期集中日本文化学習の試み」『日本語教育』105：111-120.
- 三島登志子，1975，「日本語教授法の焦点——サンフランシスコ州立大学の場合」『日本語教育』26：67-70.
- 水谷修，1959，「アメリカ人に日本語を教えて」『児童心理』13（12）：82-87.
- 水谷修，1960，「日本語というものは——「国際基督教大学の日本語教育の一日から」」『言語生活』101：64-72.
- 水谷修，1978，「外国人に対する日本語教育」『岩波講座 日本語 別巻 日本語研究の周辺』岩波書店，89-128.
- 水谷信子，1969，「日英両語の比較——仮定法的表現を中心として」『日本語教育』14：2-23.
- 宮地宏，1973，「日本語教育への反省——アメリカでの教育の現状と問題点」『日本語教育』19：60-71.
- 宮地宏，1975，「目には青葉…」『日本語教育』27：17-24.
- 宮本与作，1947，「米兵に日本語を指導する」『時事英語研究』2（9）：28-29.
- 宮本与作，1948，「米兵に日本語を指導する」『時事英語研究』3（1）：14-16.
- 無記名，1949，「米国陸軍語学校に於ける日本語教育」『時事英語研究』4（5）：6-7.
- 森田富美子，1985，「国際学友会」『日本語学』4（7）：40-54.

- 森田良行, 1969, 「日本語教育における文法の問題——「ない」の用法を中心に」『講座日本語教育』5:37-57.
- 森本郁代, 2001, 「地域日本語教育の批判的再検討——ボランティアの語りに見られるカテゴリー化を通して」野呂香代子・山下仁編『「正しさ」への問い——批判的社会言語学の試み』三元社, 215-247.
- 安井朱美・宮本茂生・目黒秋子, 2004, 「ビデオ版カルチャー・アシミレーターを利用した異文化理解及び日本語学習の試み——日本人留学生の韓国での体験から」『日本語教育』120:133.
- 安田敏朗, 1997, 『帝国日本の言語編制』世織書房.
- 山下秀雄, 1986, 「新教科書体系について」『日本語教育』59:108-114.
- 山下秀雄, 1990, 「東京日本語学校の歩み」『日本語教育研究』24:54-83.
- 山下仁, 2001, 「敬語研究のイデオロギー批判」野呂香代子・山下仁編著『「正しさ」への問い——批判的社会言語学の試み』三元社, 51-83.
- 山本芽里, 2010, 「「外国語」に対して「母国語」-「母語」の位置関係にある「X 語」の提案——フランス語の *langue étrangère* 概念を足場として」『リテラシーズ——ことば・文化・社会の日本語教育へ』くろしお出版, 7:21-29.
- 吉野耕作, 1997, 『文化ナショナリズムの社会学』名古屋大学出版会.
- 渡辺正文, 1969, 「外地における日本語教授法の変遷」『日本語教育』13:47-55.
- Anderson, Benedict, 1991, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Revised ed., London: Verso. (=1997, 白石さや・白石隆訳『増補 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』NTT 出版.)
- Funk, Wilfred, 1955, *Six Weeks to Words of Power*, New York:

著作権保護コンテンツ

Pocket Books.

Krippendorff, Klaus, 1980, *Content Analysis: An Introduction to Its Methodology*, Beverly Hills: Sage Publications. (=1989, 三上俊治・椎野信雄ら訳『メッセージ分析の技法——「内容分析」への招待』勁草書房.)

Nunan, David, 1988, *The Learner-centred Curriculum: A Study in Second Language Teaching*, Cambridge: Cambridge University Press.

索引

- A
- CLT (Communicative Language Teaching)164
- GHQ76
- Modern Japanese for University Student I*42
- Six Weeks to Words of Power*116
- あ
- 挨拶134
- アイデンティティ165, 167
- アクションロールプレー173
- 浅野鶴子89
- 『アジア太平洋地域繁栄の哲学』148
- 『「甘え」の構造』112, 121
- アメリカ語119, 126
- アンダーソン, ベネディクト …2, 4
- イ・ヨンスク8, 13, 55, 77, 81
- 池上嘉彦51
- 異文化間教育165
- 異文化教育196
- 異文化コミュニケーション能力…58
- 異文化性164
- 異文化適応164, 174
- 異文化理解160, 196
- 今井むつみ51
- 移民153
- インカピロム, プリヤー146
- インドネシア政府派遣技術研修生85
- 上田万年8, 77, 137
- 江藤淳147
- エリクソン, エリク・ホーンブルガー167
- 王道主義17
- 大平未央子52
- 岡崎敏雄・岡崎眸163
- 岡部長景76
- 小川誠148
- 小川芳男116
- 小山真理151
- オーディオ・リンガル191
- か
- 外国人登録者数3
- 外国人のための日本語教育学会…93
- 外国的な思考様式116
- 改正出入国管理及び難民認定法 …3
- 『改訂標準日本語読本巻一』88
- 学習者主体163
- 学習者中心52, 162
- 川上郁雄35
- 川瀬生郎106
- 記述単位60
- 北条淳子123
- 木村宗男34, 77
- 教育言説分析32
- 教育目標155, 190
- 教育理念160, 169

- 教化意見書 ……………13, 17
 教科書 ……………23, 41
 教科書分析……………42
 教材 ……………23, 26
 教授法……………23, 26, 81, 138
 共同体……………2, 10
 釘本久春 ……………138
 工藤哲四郎……………19
 倉又浩一 ……………115
 クリッペンドルフ, クラウス…………60
 厨川文夫……………81
 敬語 ……………52, 96
 『月刊言語』……………112
 言語学 ……………112
 言語血液論 ……………136
 『言語生活』……………89
 言語相对仮説……………51, 127
 言語と思考……………50
 言語ナショナルリズム……………10, 16, 98
 言語文化研究所……………76, 82, 89
 言語編制……………14
 現実レベル……………30
 言説の自明性……………53
 語彙……………92
 小出詞子……………95
 ゴウ, リサ……………36
 公教育 ……………8
 行動様式……………49
 皇民化……………17
 国語 ……………5, 8, 10, 14
 国語改良……………77
 国語学 ……………8
 国語審議会 ……………150
 国語対策協議会……………19
 「国語」統一化政策……………13
 『国語問題五十年』……………77
 国際学友会……………85
 国際社会に対応する日本語の在り方
 ……………150
 国府種武……………19
 国民国家…3, 4, 10, 102, 162, 167, 177
 国民性……………95
 国民精神……………16
 国民統合 ……………3, 5
 個性……………33
 コソアド詞 ……………108
 後藤新平……………16
 『ことばと国家』……………6
 ことばと文化の関係……………57
 駒込武 ……………10, 15, 56, 75
 コミュニカティブ・アプローチ
 ……………163
 コミュニケーション ……………166, 173
 コミュニケーション能力 ……148, 163
 誤用分析 ……………133
 近藤純子 ……………138
- さ
- 酒井直樹 ……………7
 榊原政弥 ……………102, 136
 阪田雪子……………89
 サピア・ウォーフの仮説……………51
 塩田勉 ……………121
 塩谷奈緒子 ……………159
 思考形式 ……………102
 思考様式言説 ……………32, 48
 実証研究……………99
 シモンズ大学 ……………151

社会・文化行動 ……………166
 社会文化行動 ……………173
 出版語 ……………4
 上甲幹一……………82
 『初等科国語』 ……………56
 助詞「も」 ……………102
 新公学校規則……………16
 進駐軍……………86
 ステレオタイプ ……………154, 157, 160
 牲川波都季 ……………34, 52
 関正昭……………23, 81, 82
 宣教師……………85
 占領期……………75, 81, 85
 『想像の共同体』 ……………4

た

タイ ……………146
 台湾……………16, 17, 78, 138
 タスク中心 ……………163
 田中克彦……………6, 92
 田中望……………35
 田中宏 ……………139
 田中里奈 ……………27, 31, 41, 88
 谷泰 ……………112
 タマサート大学 ……………146
 多様性 ……………150, 152, 160, 169, 177
 中国華北部……………17, 18, 79
 朝鮮……………16, 17, 78, 138
 直接法……………18
 辻村敏樹……………96
 適応 ……………148
 寺村秀夫 ……………107
 伝統文化……………49
 天皇制……………18

土居健郎 ……………112, 121
 ドイツ語教育 ……………115
 東亜共通語……………14
 同化 ……………13, 35
 東京日本語学校……………85
 統語論 ……………113
 得丸智子 ……………152
 富田隆行 ……………131, 157

な

中居順子 ……………174
 長沼直兄……………76, 88, 93
 長沼守人……………76
 ナショナリズム ……2, 4, 42, 49, 59,
 130, 170, 177, 180
 「なる」……………132, 157
 西尾寅弥……………90
 西川長夫 ……………3, 5, 167, 171
 21世紀への留学生政策懇談会 ……148
 日本語学 ……………106, 110
 日本語教育……………11
 『日本語教育』 ……23, 39, 73, 99, 107,
 114, 136, 173
 日本語教育学会 ……………40, 93, 153
 日本語教育史研究……………23
 日本語教育振興会……………76
 『日本語教育史研究序説』 ……24
 日本語教育政策……………43
 『日本語教授の具体的研究』 ……82
 日本語ナショナリズム ……10, 56, 72,
 136, 170
 日本語＝日本人の思考様式論 ……63,
 72
 日本語の国際化……………55

日本語普及……14, 15, 16, 20, 77, 137
 日本事情 ……35, 84, 146, 166, 173, 191
 日本人……7, 11
 日本人の思考様式論……63
 日本精神……14, 16, 18, 19, 76, 137
 日本文化……55
 入管法改正 ……3
 人間主義アプローチ ……164
 認知言語学 ……173
 スナン, デビット ……163
 ネイティブスピーカー／ノンネイテ
 ィブスピーカー……52
 ネウストプニー, J. V. ……166, 192
 ノーショナル・ファンクショナルシ
 ラバス ……192

は

発想 ……104
 発想法……75, 89, 93, 98, 99
 「は」と「が」……106
 話しことば ……7
 春原憲一郎……35
 比較文化論 ……112
 非日本人 ……11, 16
 表現形式 ……102
 標準語……8, 77
 標準的「日本語」……19
 平高史也……25
 広田照幸……33
 ファンク, ウィルフレッド ……116
 普通教育施行規則……16
 プラザ合意 ……148
 文化……57
 文化行動能力 ……192

文化的次元での同一化……16
 文化的次元での包摂……20
 文化的多元主義 ……168
 文化統合政策……15
 文法……92
 米軍……85
 方言 ……8
 法制度的次元での差別……20
 法制度的次元での差別化……16
 母語……92
 母語干渉 ……92, 99
 母国語……92
 母国文化の担い手 ……161
 保科孝一……8, 13, 55, 77
 細川英雄……57, 191
 ボランティア……37
 本音 ……154

ま

町田敬子 ……173
 松永典子……27
 マハティール・ビン・モハマド
 ……148
 マラヤ大学 ……148
 マレーシア ……148
 満洲国 ……14, 17, 138
 満州国……78
 三上章 ……107, 113
 『象ハ鼻ガ長イ』……107
 三国純子 ……151
 三島登志子 ……124
 水谷修 ……92, 94, 139
 水谷信子……99
 宮地宏……48, 119, 125

宮本与作	85
迷惑の受け身	132
メリーランド大学極東部	85
もったいない	129
森田良行	104
森本郁代	37
モントリオール	167
文部省	18

や

安井朱美	175
安田敏朗	13, 55
山口喜一郎	18

山下仁	52
吉野耕作	2

ら

ラング	83
理念レベル	30
留学生受け入れ10万人計画	148
ルック・イースト政策	148
歴史観	26
ロールプレイ	175

わ

渡辺正文	138
------	-----

著者略歴

性川波都季（せがわ はづき）

最終学歴，専攻：早稲田大学大学院日本語教育研究科修了，
博士（日本語教育学）

現職（経歴）：早稲田大学日本語研究教育センター助手，横浜
国立大学留学生センター非常勤講師，ホープカレッジ現代古
典言語学部客員助教等を経て，現在，秋田大学国際交流セン
ター准教授

専門：日本語教育学，教育言説分析

著書：

『わたしを語ることばを求めて——表現することへの希望』三
省堂，2004（細川英雄との共著）

『変貌する言語教育』くろしお出版，2007（佐々木倫子・細川
英雄・砂川裕一・川上郁雄・門倉正美と共編）

主要論文：

「学習者主体とは何か」細川英雄編『ことばと文化を結ぶ日本
語教育』凡人社，2002

「日本語教育学における「思考様式言説」の変遷」『日本語教
主要育』121，2004

「「共生言語としての日本語」という構想——地域の日本語支
援をささえる戦略的使用のために」植田晃次・山下仁
編『「共生」の内実——批判的社会言語学からの問い
かけ』三元社，2006

「日本人の思考の教え方——戦後日本語教育学における思考様
式言説」佐藤慎司・ドーア根理子編『文化，ことば，
教育——日本語／日本の教育の「標準」を越えて』明
石書店，2008

「表現することへの希望を育てる——日本語能力教育と表現観
教育」『早稲田日本語教育学』9，2011

「他者の固有性を発見する——多文化コミュニケーション入
門」の理念と設計」『教養基礎教育研究年報』13，
2011

著作権保護コンテンツ

せんご にほんご きょういくがく
戦後日本語教育学とナショナリズム
しこうようしきげんせつ み ほうせつ さいか ろんり
—「思考様式言説」に見る包摂と差異化の論理—

発行 2012年1月31日 初版第1刷発行

著者 せがわはづき
性川波都季

発行所 株式会社 くろしお出版
〒113-0033 東京都文京区本郷3-21-10
TEL 03-5684-3389 FAX 03-5684-4762
<http://www.9640.jp>
E-mail: kurosio@9640.jp

印刷所 株式会社 シナノ書籍印刷

装丁 桂川 潤

© Hazuki SEGAWA 2012, Printed in Japan

ISBN 978-4-87424-545-3 C3037

●乱丁・落丁はおとりかえいたします。本書の無断転載・複製を禁じます。

著作権保護コンテンツ」